人の心に寄り添う医療人になる

第6回

伝統と革新を生きる・2

歌舞伎役者，俳優
市川染五郎（いちかわそめごろう）

昭和医療技術専門学校学校長
山藤　賢（さんどう　まさる）（インタビュアー）

（撮影：野村佐紀子）

市川染五郎（いちかわ　そめごろう）氏 プロフィール

本名，藤間照薫（ふじま　てるまさ）．歌舞伎役者，俳優．屋号は高麗屋．日本舞踊松本流の家元で，舞踏家名は松本錦升（まつもと　きんしょう）．1973年1月，9代目松本幸四郎の長男として，東京都に生まれる．1978年10月，NHK大河ドラマ「黄金の日日」に子役で出演．1979年3月，歌舞伎座「侠客春雨傘」で3代目松本金太郎を襲名して初舞台．1981年10月，歌舞伎座「仮名手本忠臣蔵」7段目の大星力弥，他で7代目市川染五郎を襲名．2014年11月，初世松本白鸚三十三回忌追善興行「吉例顔見世大歌舞伎」において，高麗屋のお家芸である「勧進帳」で，初めて弁慶役を勤めた．インタビュアーの山藤賢先生とは私立暁星学園にて小学校から高校まで同級生．

［前号（5月号）より続く］

伝統と革新を生きる

山藤（さんどう）：そろそろ，まとめに入る時間かな．今日は，あっという間に時間が過ぎるね…．染五郎は，今，歌舞伎界の歴史や伝統を紡いでいく責任や義務があると思うのですが，それは同時に，同じことをやっていればいいということではなく，革新も必要かと思います．歌舞伎は400年以上も続いているけど，守るものと同時に，時代に合わせて変えていかなければならないものもあるじゃない？　そういう歴史のなかの一部として，後輩たちにつないでいる感覚とか，使命感とか，その辺の背負っているものとかをどう感じているかなと．そのあたり，「イマ」を生きる染五郎としては，どう考えていますか．

染五郎：歌舞伎の世界では，子役から始めているわけですけど，子役の時代を過ぎると，突然環境が変わって「もうわかるでしょ」って世界なので（笑）．そこで，“これはもう自分でちゃんとやっていかなきゃならないんだ”と気付かされました．そのうえ，教わる人たちというのは，お祖父さんやひい祖父さんみたいな人たちが多いので，この歳にしては，お世話になった人と別れる（亡くなる）という経験は，普通の人と比べてもたぶん多いと思うんです．

山藤：確かにそうだよね．

〔本連載の形式〕各界で著名な先生方への山藤先生のインタビュー（対談）にて，組織で働くこと，チーム内でのコミュニケーション，教育，臨床検査技師としての知識・技術の継承と向上，患者さんの心・命，自分の人生の役割などについてお話いただきます．対談のなかで，山藤先生が感じた医療とのつながりの部分を，心の「共振」ポイントとして解説を加えていただきます．

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2016

0301-2611/16/紙：¥500/電子：¥750/論文/JCOPY

2024/04/27 13:38:51

染五郎：だから“今まで見守ってくれていた人とか，あの役を教えてくれた人がもういない，教えてくれたものが僕の中にしかない．僕がそれをできないと，その人がやってきたことが，全く途絶えちゃう”ということなどを思い始めたところから，使命感が生まれてきたのかなぁって．

山藤：その話はすごくいいなぁ…．“自分がやらないと途絶えてしまう”という想いね．では，それを後輩に伝えていくということに関しては，どのような難しさがありますか．

染五郎：歌舞伎役者としての教科書はないから，これはこういう形，こういうセリフというのは，それぞれのお家によって違うんだけど，歌舞伎っぽいとか，歌舞伎っぽくないというのはなんとなくあって，それが難しいんだよね．後輩たちに教えていく立場になって思うことは，ベースにあるのは踊り，長唄，義太夫節などの芸事なので，まずは，それらをたたきこんでもらいたいです．

山藤：それは，基礎やベースとなる技術に関してはしっかりと，って感じ？

染五郎：そうだね．ただ，歌舞伎には，こういうときにはこういう言い方，こういうときにはこういう形，という技術の引き出しが限りなくあるから形にはしやすいんだけど，それができたからといって，感動できるものにはならないんだよね．芝居とは，本当に気持ちが動いてやっていないと，何も伝わらないんだよ．

山藤：なるほどな～．では，難しい質問かとは思うけどあえて，技術が感動につながる部分にある，その要素って何？

染五郎：う～ん，後輩の指導のときには，「そこにアクセントを付けて言うセリフ，そういう言い回しじゃなくて，これを伝えたいんだから，これを一番立てて言って，後は流してもいいんだよ」「この役はこういう気持ちで，こういう言葉を伝えたいから，こういう形になるんだよ」というように教えているけど…．

染五郎さん（左）と山藤先生（右），楽屋前にて
松竹創業百二十周年　吉例顔見世大歌舞伎　十一世市川團十郎五十年祭　夜の部「歌舞伎十八番の内勧進帳」に染五郎さんが出演（富樫役）直後に撮影．

山藤：なるほど．形から入るのではなく，役の思いや気持ちを伝えて，なぜその形になるのか，というところから教えているんだね．

染五郎：その言い方，伝え方が，本当にリアルなもので，言葉だけじゃないから，すごく難しいんだよ．

山藤：それは，その人の生きざまとか，培ってきたものが表れるような気もするんだよね．

染五郎：そういうのは，出るね．本当に，その人の感覚だよね．

山藤：僕は最近，ある講演で“表現と表出”という言葉，感覚の違いについての話を聞いて，いいなぁと思うことがあってね．例えば，コンビニエンスストアのアルバイト店員が，「笑顔で“ありがとうございました”という表現をしなさい」というマニュアルを言われて，明らかに作った不機嫌な笑顔で，お客さんに「ありがとうございましたぁ～（早口）」って

2024/04/27 13:38:51

ぶっきらぼうに言っても，言われたほうには全然気持ちが伝わらないじゃない？　だけど，同じ「ありがとうございました」というセリフを心のこもった笑顔で言って，その気持ちがちゃんと伝わる人もいるじゃない？　それは，表現の仕方の問題じゃなくて，表出の問題なんだって．表出するものというのは中から出てくるので，僕は，それは，その人の積み重ねや人間性そのものじゃないかという気がしているんだよね．だから，同じ演技，同じ技術で同じものを伝えても，その表出によって，どれだけ伝わるかは変わってくるんだと思うんだよね．

染五郎：そうだね．今は記録のビデオがあるから，観ていないものでも，どういうお芝居かわかるんだよね．これだけいろんなものが情報として簡単に手に入る時代になって，便利でいいんだけど，記録のビデオでは，ここでこういうふうに切って言うとか，これを速く言う，ゆっくり言うとか，その表現しか見えないんだよ．何度も巻き戻しすれば，表現だけは，同じことを何度も名人がやってくれるわけだからね．

山藤：同じように表現できたら，“これでいいんだなぁ”と思ってしまうかもね．

染五郎：本人が“できた”と思っていても，全然違ったものになっているよ．

山藤：そして，その人は，何が違うかわからない可能性があるよね．

染五郎：確かにそこで切って言っている，名人と同じように言っている，でも全く伝わらない．記録ビデオなどいろんなもののおかげで，テクニック(技術)だけ見れば，たぶん，今の歌舞伎役者は過去史上最高に器用なんだと思うよ．昔は，そのお芝居をしていなければ知らないわけだから，技術も限られていたんだよね．でも結局，その技術にどれだけ気持ちが乗っているかで，伝わるものは全然変わってくるんだよ．技術は，感動や興奮を伝えるための道具であって，「技術を身につける」，そのことだけに価値があるものでは決してないんだと思う．

山藤：なるほどね．でも，だからこそ，その場にいる，感じることが大事だと思うんだよ．僕は，染五郎が初めて弁慶を演じた(注：「勧進帳」は染五郎さんの屋号である高麗屋のお家芸)のを観てすごく感動して，帰ってからも，何日間か感動が続いて，身体の中でずっと映像と音が響いている感じだった．こういう感じは，ビデオで映像だけを見てもないと思うんだよね．だからこそ，歌舞伎のようなものはライブであるということがいいね．若い皆さんにもぜひ足を運んでいただきたい！　これは宣伝ね(笑)

染五郎の「イマ」の感覚

山藤：弁慶の話も出てきたので，これまで歌舞伎役者として生きていて，感じている「イマ」の感覚を教えてください．

染五郎：そうですね．6歳で初舞台を踏んで，これまでずっとやってきたわけだけど，子どものときには，“大人になるとオヤジになれる”と思っていたんだよ．まわりからも，「まだ若いからね」「最初だから，それは無理だわ」というようなことを言われていたし．でも，オヤジの歳になったらできるようになっているのかといったら，そんなことはないんだよね．ただ，年を取っただけで．十いくつなら，十いくつのときのオヤジのやったものは，音として残っていたり，残っていなかったりだけど，それを聞いていると，もうすでに，今のオヤジなんだよ．自分の親が自分と同じ歳のときに何をやっていたかを見ると焦るよね．

2024/04/27 13:38:51

共振のポイント

染五郎の話はすごくいい話だと思いました．われわれ医療人も同様ではないでしょうか．表面上の身につけた技術があっても，それを伝える術(すべ)がなければ意味はありません．想いの部分がない技術，何のためにやっているかが伴っていない技術，技術のための技術…，それでは意味はありません．なぜその技術を習得し，それを道具としてどのように使うのか．そこには，その人それぞれの生きざまや哲学まで深くかかわってきそうです．染五郎の言っていた想いの部分，すごく大事なことかなと思います．

また昨今では，患者さんへの接遇が医療の現場でも重要視されています．対談ではアルバイト店員の話で例えましたが，医療の現場でも，「患者さんには“お大事にどうぞ”って言うもんだよ」と教えられたとします．でも，相手も見ないで「お大事にどうぞ」と言うと，「何だ，こいつのお大事にどうぞは．全然そう思っていないじゃないか」と思われてしまいます．その言葉が，心がこもっているように思われるか，温かさがあるのかは，その人の表出，内面から自然に出てきたものによるのではないでしょうか．

指導者の立場からだと，ただただ表現の方法を指導して「何で，あんな態度でお大事にって言うんだよ」って怒っても，「いや，ちゃんと言いましたけど」という言葉が返ってくるだけかもしれません．なぜ怒られたかは，本人にはわからないかもしれません．表出は，これまでの経験や，積み重ねてきた自分自身のあり方，考え方が表れます．この話を聞いて，この機会に自分自身のあり方が正しいか，指導する立場の人間も，あらためて襟を正す必要がありそうです．染五郎の話からは，歴史と伝統から紡ぎ出される重みを感じました．(山藤)

山藤：なるほど．

染五郎：年を取ればできることじゃないかもしれないけど，今やらないと，いつまでもできないし，今なんとかしたいという連続で，毎日やっているんだよ．

山藤：そういう感覚だと，弁慶をやる，という夢がかなった後はどう感じたの？

染五郎：弁慶役をやってからは，“何で，もっと早くできなかったんだろう”ということばかり考えてしまうんだよなぁ．

山藤：早く？

染五郎：やったことはうれしいんだけど…．ほぼ年齢分，41年間ぐらい憧れてきて，夢がかなって思ったのは，“夢はどれだけ早く実現しなければならないか”ということだったんだよ．やり終わって感じたのは，自慢や満足感ではなかったね．

山藤：達成感はある？

染五郎：本当に好きだったし，ずっと憧れていたんだよね．だから今でも，“やったのかなぁ”と，夢みたいな，不思議な感覚だよ(笑)

初日にもね，全然実感がないから緊張しなかったの．あれだけ，初日に“緊張してるな”と思わなかった芝居はなかったよ．そして，日

2024/04/27 13:38:51

に日に，だんだん緊張してきて…．“本当に，僕，弁慶をやってるんだ”という実感が湧いてきたのは，後からだったんだよね．

僕の場合は，去年(2014年)が弁慶をやるときだったんだと思うけど，“もっと早くやれていなきゃいけなかったんだ”っていうことを，終わってからは強く思うんだよね．

山藤：小さな頃からの夢がかなっても，達成感や虚脱感ではなく，また続いていく何かに向かっている感覚だよね．もちろんやりきった感動は大きかったし，素晴らしい経験だったんだろうけどね．でも，そこに，あらためて，自分に課す使命感みたいな感じがあるんだろうなぁ．また，その経験が何かにつながっていくんだろうね．

染五郎：そうだねぇ．今は，何につながるんだろう？と思いながらやっているけど，60歳を過ぎたぐらいに振り返って，いろんなことをやっていたなと思うだけでも楽しいかな，と思ったりはするね(笑)

染五郎と歌舞伎界の「これから」

山藤：それでは，最後にまとめみたいな感じで，これから市川染五郎としてどう生きていきたいのかということと，歌舞伎界が今後どうなればいいと考えているのかについて聞かせてください．

染五郎：はい．市川染五郎として，まずは，父や叔父のやってきたことを，自分がしっかりと“受け継ぐ”ということを，あえて口に出して，意識してやっていきたいです．その一方で，新しいものを作っていくということも，比較的，多く経験させていただいているので，自分でしっかり，新しいものを作れるようにならないと，とも思っています．しっかり“受け継ぐ”ということを，あえて意識してやっていこうと思っているだけに，新しいものに関しては，「本当に新しいもの」を作っていきたいです．

歌舞伎界については，常に危機感をもってやっていかなければと思っています．そして，これからもずっと，一つの感動するお芝居をやり続けている世界ではあってほしいです．

山藤：ありがとうございました．

この雑誌は臨床検査技師を主な読者対象としているんだけど，そういう医療に携わる人に，メッセージをお願いできる？

染五郎：毎年，人間ドッグには行っていて，これはもう，そういうことを言うと怒られるんだけど，せっかく検査したのに何にもないと，何か損した気分になるんだよ(笑)．「バリウム，飲んでください，最後まで飲んでください，ゲップしないでください，はい，回ります，回ります，横になって，そしてその形で止まって～！」って(笑)

山藤：(笑)

染五郎：「それで何もないかぁ！」みたいなね(笑)．でも，それで安心するわけだよね．ありがたい話です．

声が出なくなった，風邪をひいた，熱が出た，というときは医者にかかるんだけど，普通なら，「しばらく安静にしていて」というところを，「声が出なくなってきているんだから，出して」「今日も公演があるので，今すぐ熱を下げて」(笑)，という，それはもう，ご理解いただかなきゃいけない以外ない感じで…．役者は，とてもわがままな患者なんだよね．

山藤：最後のまとめにきて，面白い話するなよー…(笑)

染五郎：まぁ，迷惑な患者だとは思うけど，

2024/04/27 13:38:51

例えば病院に行って，採血に行ったらそこに同じ臨床検査技師さんがいるということで，声を掛け合えば，実際はそれだけでまず安心して，何だか元気になるよ．学校の先生と同じ感じがする．卒業して学校に行って同じ顔があると，あっ，英語のうるさいアイツまだいたっ！みたいな(笑)．それだけで感動してしまうよね．何かそういう，「そこにいる」だけでもらえる安心感っていうのが，医療にかかわる人たちにはあるよね．本当に責任があって忙しいとは思うけど，尊敬するし，心から感謝しています．だから，未来を一緒に作っていく仲間として，すごく頑張ってほしいと思っていますし，応援しています．ということで，わがままな患者で無理しか言わないけど，僕が行ったときにはお願いだから嫌な顔しないでね(笑)

山藤：これが全国の臨床検査技師さんへの染五郎からのメッセージということで(笑)

本日は，お忙しいなか，どうもありがとうございました．これからも体には気をつけて頑張ってください．

染五郎：こちらこそありがとうございました．お互い頑張りましょう．　(了)

山藤　賢(さんどう　まさる)氏 プロフィール

1972年東京都生まれ．昭和大学医学部，同大学院医学研究科外科系整形外科学修了．医学博士．小学校から高校までは私立暁星学園サッカー部で活躍．東京都大会で優勝した他，全国大会にも出場した．現在は臨床検査技師教育に特化している昭和医療技術専門学校の学校長として学生の育成にかかわる傍ら，現役の臨床医として患者とも向き合う．医療法人社団昭和育英会理事長，横浜つづきメディカルグループ代表として医療機関を複数経営．日本臨床検査学教育協議会においては，副理事長を務め，2014年には学会長の任も務めた．また，なでしこジャパンのチームドクター(オリンピック，ワールドカップなど帯同)，東京都サッカー協会医事委員長(現)を務めるなど，スポーツドクターとしても活躍している．また，2013年の著書「社会人になるということ」(幻冬舎 刊)は，丸善日本橋本店にて，週間ランキング1位(ビジネス部門)になるなど，その活躍は，医療界にとどまらず，広いフィールドで注目されている．

本連載に関するご質問・感想などは，編集室(e-mail：kensa@igaku-shoin.co.jp)までお寄せください．

対談を終えての今回の共振

染五郎の話や生きざまからは，歴史・伝統を背負う重みと責任，使命感を感じました．われわれ医療人も同様です．臨床検査技師としてのこれまでの歴史，文化を守り踏襲することは大事です．しかし，同時に，時代やニーズに合わせ，それに新しいものを加えていかなければ，その価値は失われていってしまいます．さらに，それを次の世代に引き継ぐ使命もあります．

私のように染五郎と同世代の方々，また責任者として指導者の立場に立つような方々，そして若い方々にとっても，それぞれの立場で，たくさんの気付きがある内容だったのではないかと思います．職種や文化は違えども，また人それぞれ，響くポイントは違えども，視点を変えれば共振できるポイントがたくさんあった対談だったのではないかと，読み返してあらためて感じています．歌舞伎に限らずですが，僕らも，医療人である前に，文化的に生きる一人の人間として，少しでも「伝統と革新」の世界に触れる機会があると，より深みのある豊かな人生を歩めるかもしれませんね．同じ時代を生きる染五郎に感謝．　(山藤)

2024/04/27 13:38:51